

まえがき

本書は、いま日本の大学でグローバル化について学ぶための書として企画された。

大学生にとって、グローバル化という言葉は、もはや聞き古されたものとなっている。2011年1月3日の新聞に掲載された「躍進する大学の学長メッセージ」(関東圏私立大学24校)では異口同音といってもよいほどグローバル化に対応した実践的教育の必要を語っている。他方、大学生世代にとって、グローバル化は新しい現象ではなく、すでにあるもの、所与の前提となっている。小中高のころに在外生活経験をもち将来国際的な場で活動したいと考えるひと(特に女性)が確実に増えている。他方、グローバル化があたりまえになっているため、なにが変わったのかということがほやけ、グローバル化の正体がみえないためにたたずんでいる。あるいは2008年の米国のリーマン・ショックとそれに続く就職難は、「グローバル化に巻き込まれる」という印象を強く与えた。

本書は、このような21世紀のグローバル化のなかの日本社会に生きる大学生世代に向け、新しい視点を提示する。そこでは、つぎの3つの態度が鍵となる。①価値意識をきちんともち、②既存のディシプリン(学問や知識)をつなぎ合わせ(学際性)、③自ら行動し問題解決をめざす(実践型・問題解決型)ことである。したがって、本書は、グローバル化とはなにかという概説でも、あるいは「グローバル文化学」という新しい学問領域をつくることをめざすものでもなく、グローバル化を多角的な視点から捉え直す知の生成の場を提供することに目的がある。それは、本書の成立ちに関係している。

2005年にお茶の水女子大学文教育学部に「グローバル文化学環」という教育コースが誕生した。誕生といっても国際学やグローバル学を専門とする独立の学科をつくるのではなく、地域研究、多文化交流、国際協力の3つの分野を柱とし、関連する教員が集まるところに特色がある。英語では、Global Studies for Inter-Cultural Cooperationと名付け、文化の違いをこえて協力・共存して

いくために必要とされる知識と態度を学ぶという方向性を表している。書名である『グローバル文化学——文化を越えた協働』は、以上のようなねらいを表している。本書は、このカリキュラムの授業科目のひとつである「グローバル文化学総論」の講義をもとに企画された。とはいえ本書のねらいから、構成にあたってはより広く企業や地域や学校教育などさまざまな場で「グローバル化」に直面する人々に読んでいただけるように工夫した。

本書は、3部構成となっている。第I部「ナショナルからグローバルへ」は、国境、文化概念、労働に焦点をあて、グローバル化の二面性を照射する。第II部「ローカルからグローバルへ」では、マサイの学校教育、コーヒーとタンザニアの村落開発、イスラーム認識、日本という空間に焦点をあて、地域とグローバル化の関係を考察する。第III部「グローバル化と私たち」は、現代日本社会におけるグローバル化の身近な受けとめを、メディア、留学生交流、日本語教育に着目して検討する。これら10の章には、用語解説、参考文献、発展学習(推薦図書)を付し、大学などの授業で用いるときの学習の手助けとなるように意図した。序章「グローバル化とは一体何だろうか」と終章「グローバル化は私たちに何を問うているのか」は本書全体をまとめるものである。

グローバル文化学環創設のときに、アメリカ合衆国の9つの大学のグローバル学のコースを訪問した。いずれのコースも既存のディシプリンの教員を引きはがしてつくった寄り合い所帯であり、何かを創る場であることが魅力となっていた。本書はそのようなサムシングである。

最後になったが、「グローバル・メディア論」の講義を担当し本書のために特別にご寄稿をいただいた川崎賢一氏(駒澤大学)と本書の出版を快く引き受けてくださり、適切な助言をいただいた法律文化社の小西英央氏に改めてお礼をもうしあげたい。

2011年1月

三浦 徹